

当時の私は、海外出張することが多くイラク行きも海外出張の一つで特別な備えなど考えていませんでした。ところが、予防接種の備えが必要、更に、私のイラク行きが新聞やテレビ新聞で小さく報道されたこと、また、短期間でイラク行きが決まりドタバタで準備をしたのです。

1. 予防接種の備え、知らなかったサソリの存在

外国に長期滞在する場合、その場所にもよりますが大切な備えが一つあります。それは、予防接種をして行くことです。私の場合、イラク行きが決まり産業医により予防接種の指示を受けました。

私は、アフリカやアマゾンの奥地に行くわけではないので、必要ないだろうと考えておりましたが、何故もっと早く来ないのだ！今からでは間に合わない1年前から準備しなければ、効果がない。せめて半年必要・・・となったのです。結局、破傷風の予防接種のみで、それも確実にするためには、あと一回必要だったのですが、それも出来ないままでイラクに旅立ったのです。

イラクに行って驚いたことに、疫病対策よりサソリです。シェルター等の暗闇地下施設での調査においてサソリが居るのです。これは、予防接種よりサソリ対策、皮手袋が必要だったのです。素手でサソリに触れたことが何回かあったのですが、サソリに刺されずに済んだことは幸運でした。

2. マスコミ報道・妻の覚悟

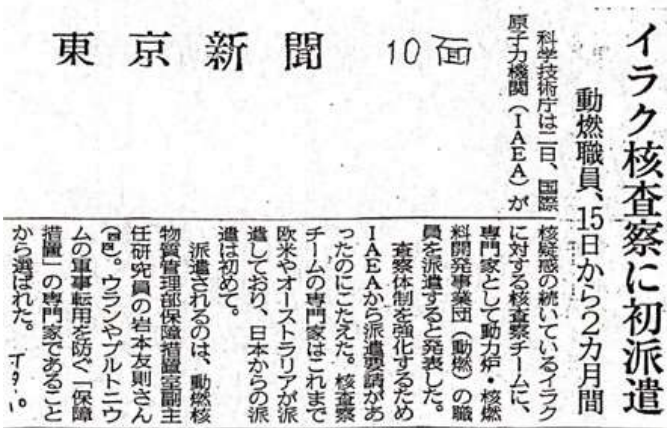
私のイラク行きが、イラクへの出発を翌週に控えた6月1日にテレビで、2日に小さくですが新聞に報道されてしまったのです。あろう事か

妻の目に止まってしまったのです。事の次第を悟ったのか妻は、私がイラクに行く前に、万一の時のために、私と子供達に言葉を残しておいてと言うのです。この時の妻の眼差し、そして穏やかな口調・・・生涯忘れることが出来ないでしょう。とりあえず妻と子供達に、万一の時のために言葉（遺書）を出かける直前に書き上げたのです。

そして、以降、機会ある毎に何時死んでも大丈夫なように互いに言葉を残して出かける事が夫婦のルールとして定着したのです。しかしながら、今日までその言葉が書かれた封筒は開封された事はありません。

また、マスコミ報道には肝を冷やしたのです。それは、私の故郷の山陰のある地方新聞に私のイラク行きが、かなり大きく記載されたのです。

当時、私の所属する組織の一事業所が、その地方にあり、その記事が記載されていることを知らさ



れたのです。そして、この記事の人物が、地元出身であることを、この地方紙が知っていたのなら、もっと大きく取り上げられたであろうと言うのです。私は、この記事が故郷の母の目にとまらぬ事を願ったのです。それは心配性の母にイラク行きが知れようものなら、卒倒してしまう・・・そんな恐れがあったからです。幸いにして、この記事は、故郷の家族の目にはとまらなかったのです。そして、イラクに旅立つとき妻に、私のイラク行きを私の実家には決して伝えてはならないと、堅く口止めして出かけたのです。

しかしながら、私がイラクに行った時期がお盆期間を含んでいたことから、帰省の日程も知らせてこない私たちに対し実家より執拗な追求を妻は受け、とうとう耐えきれなくなり、あと2週間で帰ってくる時、もう少しだからと考え、ついにその事実を、実家の母に話したのです。結果は、予想通り、それを知ってから母は、ほとんど夜眠ることが出来なくなったそうです。

3. タジキスタンで銃殺

私とほぼ同時期に大学の先生から外務政務官に転身され国連のタジキスタン監視団に加わられた大学の先生が1998年7月20日タジキスタンで銃殺されると言う悲惨な事件がありました。この事件は、後にNHKのドキュメンタリー番組「秋野先生の辿った道」として俳優の竹中直人氏をレポーター役に放送されました。また、その先生の名がついた秋野豊ユーラシア基金が1年後の1999年7月20日に設立されたのです。

ちなみに、こうした国連活動における保険について紹介しましょう。私が死んだ場合、国連より10万ドルの保険金が支払われ、さらに私の子供たちが大学卒業するまでの学費が支払われる事になっていました。しかし、その手続き私の妻には無理でしょう・・・多分

幸い私のイラクにおける仕事において、銃口を向けられことはあっても、命の危機を覚えることは、ありませんでした。唯一、命の危機を思えたのは、手すりの無い狭い階段幅のサーマッター（下記の写真）を登った時、上から駆け下りてくる子供たちとぶつかって階段からの落下です。30mを超える高さでは、砂地に落下しても助からないでしょう。



続く